常照
第８２６号

仏はこれ満足大悲の人なるが故に

善導『観経疏』

仏教が今から約二五〇〇年前、インドに起こった教えであることはよく知られています。ところが、仏とは何かと問われれば、それぞれが自分なりのイメージを持ってはいても、決して明瞭であるとは言えません。その証拠に、今日では成仏といえば死ぬことと同義に使われることが多く、迷いから覚めるという本来的意味は見失われているように思います。また、空を飛んだりするような、何か人並外れた超能力を持っているのが仏だと自分勝手に思い込むこともよくあるのではないでしょうか。

善導の「仏はこれ満足大悲の人なるが故に」という言葉は、仏とは何かを極めて明瞭に教えてくれています。この言葉は、仏の教えに依ることによって、はじめて何が大切であるかを見定め、方向を見失わずに生きることができることを述べる中で、なぜ仏の教えにはそのようなはたらきがあるのか

という理由を述べたものです。

大悲とは、すべての生きとし生けるものをあわれみ、その苦しみを抜こうとする心です。私たちも生き物を大切にしたり、他人をいとおしく思う心がないわけではありません。

しかし、それは自分に余裕がある場合だけに限ります。また、自分にとって都合の悪い人や憎たらしく思う人をいとおしむことはできません。このように、状況によって起こったり、起こらなかったりするようなもの、それを仏教では小悲と呼んでいます。小悲と呼び掛けることによって、自分の経験の範囲でしか物事を見ることができない私たちの在り方を教えようとしているのです。そして、自分の経験だけを当てにして、どれほど一生懸命に他人の心配をしてみても、それは相手のためにならないだけではなく、逆に相手を傷つけることがあると教えているのです。

これに対して大悲とは、私たちが何によって苦しみ、なぜにお互いが傷つけあうことになるのかという、その根本を見極めた智恵に裏付けられています。思えば、人間は幾度となく争いを繰り返し、どれほどの血を流してきたか知れません。しかし、その悲惨な経験でさえ、時には忘れ去られ、また

同じことが繰り返されてきています。それは、過去の歴史に学ぶことなく、自分の力を過信した結果であるように思われます。そのような人間の在り方を見極めたところに立って、何が本当に大切なことであるか、どうすればお互いが傷つけあうことから解放されるのかを人間に示そうとしているのが大悲なのです。

このような大悲が満ち足りているのが仏であるが故に、その仏の教えに依ることによって、どのような状況のなかに投げ出されようとも、方向を見失わずに生きることが成り立つのです。

私たちは、今、善導大師から問われているように思います。「あなたにとって仏とは何ですか」と。

（きょうのことば）

悲しみあるがゆえに
よろこびあり
煩悩あるがゆえに
菩提あり

寿命

落語の「死神」は、死神に儲け話をもちかけられた男が、医者となって人間の寿命を見分けられるようになりますが、金に目が眩み、死神を裏切ってしまったことで、目の前で自分の寿命を表すロウソクの火が消えていくというお話です。私たちも目に見えないだけで、どこかで自分の寿命のロウソクが燃えているのかと思うと、気が気ではありませんね。でもロウソクが見えない私たちに出来ることは、たとえ、短くても長くても、今この時に精一杯、自分のロウソクの炎を燃やすことだけなのかもしれません。

十一月の常例布教(ご法話)のご案内

○前　期　十一月七日(月)～十一日(金)
北海道教区十勝組　顕勝寺
講師　芳滝　智仁　師

○後　期　十一月十三日(日)～十六日(水)
大阪教区　天野北組　明教寺
講師　不死川　昌史　師

○場　所　小樽別院内
○時　間　午後二時(法要終了後)～
午後三時半

浄土真宗のみ教えについて布教使にご法話をして頂きます。
どうぞお誘い合わせ頂き、ご聴聞に来院ください。
席の間隔を保ち、換気実施の上、お待ちしております。

発行所
〒047-0017
小樽市若松一丁目四番十七号
本願寺小樽別院
電話（〇一三四）二二一〇七四四番
FAX　二九一四〇八〇番
テレホン法話　二七一一六一六番